

講演

# 今を生きる (一)

東 絶海

## 1 初めに

ただいまご紹介にあずかりました東でございます。私は、現在、高知県の出先機関に勤めております。ここ東京におきましては、高知県がどこにあるか、分らない方も、あるいはおられるかと思しますので、ちょっと説明いたします。と言いますのは、東京に仕事に来て、夜一杯やっておりますと、言葉になまりがあるせいか「どこから来ましたか」と聞かれます。「高知から」と言いますと、「あそこは大分の北ですね」とか「大分の上ですね」と言われます。「あゝそうですね、大分のすぐ北にはならないけれども、四国ですわ」と。大分の上と言うと、空なんですよ。大分の北と言うたら分るんですが、大分の上と言う。またある人は「岡山の下ですね」と言われる。確かに岡山の下は地下ですけれども、「南ですよ」と説明して、四国にありまうということの説明しております。人のことは言われません。私も福島、山形、栃木、群馬あたりは、どうも位置・配置について、いまひとつ自信がありません。

高知県は、四国の四つの県のうちの一つでありまして、太平洋に面しております。坂本竜馬の生まれた県でございます、県土の84%が森林でございます。ですから、人口は80万人を切っております。ちょうどこの辺の都市で言いますと、高知県全体で千葉市の人口より10万

人ぐらい少ない人口でございます。人が少なくて山が一杯だということになりますと、自然が残されているということになります。

私も平成20年3月までは、まだ県職員でございますので、折りに触れて高知県の宣伝をしなければいけないということでございますけれども、今日は「禅を中心に今を生きる」ということで話を進めさせていただきます。

以前、ある先生の講演会で、趣味と仕事が一致している人はまず少ないであろう。先生は、小さいときから虫とか昆虫が好きで、その道に進もうと思ったけれども、それでは飯が食えないので、医者の仕事に就いた。そして、趣味のための時間を捻出するためにかなり努力をした。しかし、趣味のために本業をおろそかにすることはなかった。かえって趣味の時間をつくるために本業を一生懸命やった。だから、趣味のある人は、仕事も一生懸命しますというような意味のお話を聞きしたことがありました。

この話を聞きまして、我が意を得たりと思ったことです。禅が趣味かどうかは別の話としまして、私は坐禅するために仕事以外のことはそぎ落としてきました。ちょうど私が42～43歳のときに四国支部の支部長をさせられまして、そのときの担当の老師は、もう亡くなられましたけれども、かなり厳しい人でした。それで私が支部長になったとき「趣味は持つな。趣味というものは坐禅だけ。一つのことですら、一生懸命やってもやれないんだ。人間は一つのことですら人間が一生かかってもやれないのだから、ほかの趣味は持つな」と言われまして、坐禅以外に何も趣味らしき趣味はほとんど持っていません。ちょっと花をいじったりする程度が恥ずかしながら趣味程度のものでございまして、あとは何もありません。ですから、今度3月に定年退職後は、時間も多少できることですから、やらなくてはいけないこともありますし、今からやってみたいこともありますので、非常に楽し

みにしております。

我々は「出家」という形をとらずに、社会で仕事をしながら坐禅をしていますので、居士禅と呼ばれております。居士禅でありながら、これまで仕事と禅のことについて、あまり触れてこなかったのではないかとのご意見が、我々の出版する『禅』という機関誌の中に載っておりまして、本日は私の来し方を振り返りながら、仕事と禅のことについてお話をさせていただきます。

## 2 出会いについて 禅との出会い

60年近い来し方を振り返ってみますと、幾つかの岐路があったということに気がきます。あの時この人と出会わなかったら、今頃どういうふうになっていただろうかということと考えますと、出会いの不思議というのを感じざるを得ません。そして、古来「仏法遇い難し」と言います。遇いがたい仏法、それから正法と言われる坐禅に出会わせていただきまして、誠にありがたく思っております。「一期一会」と言いますが、人との出会いほど恐ろしいものはありませんし、また人生に影響を及ぼすものはないと思っております。

私が「人間禅」と出会いましたのは昭和46年でありまして、「禅と出会いました」と言いましても、結局、人との出会いであります。その人というのは、今は亡き澄徹庵大重月桂老師という方でございます。岡山で精神病院の医者をされておりました。ちょうど老師は、現在の私より一つか二つぐらい下ぐらいの年でございました。当時老師は、四国支部の再建に当たっておられました。四国支部は昭和24年に愛媛県の川之江で設立されましたけれども、いろいろな都合によりまして一時閉鎖しておりました。その再建に当たっておられたわけでございます。再建場所は高知ということで、初めはお寺をお借りしまして出発しました。

坐禅の会というのは「摂心会」と言いまして、1週間連続で「坐禅

と作務」、簡単に言いますと「坐禅」と「作業」であります。その間、老師による「提唱」という講話みたいなものがあります。その撰心会に3回くらい参加しませんと、入門を許してくれませんでした。その3回の撰心会に参加するということは約1年くらいかかるんです。そういうふうなことで、縁ができたのは46年ですけれども、47年に入門しました。

さて、就職ということになりました。人間禅の方では、老師に参禅して初関を通りますと「道号」というのをくれますが、その昭和47年当時、私はまだ道号をいただいておりませんでした。

さて、就職ということになりまして、老師にご相談に行きましたら、「お主は高知に残れ」と言うんですよ。無茶苦茶な話でございます。今でも高知県は、有効求人倍率が約0.5倍くらいでありまして、当ても就職先がありませんでした。特に専門が「林業」という特殊なものでございましたので、なお一層ないわけです。実はもう相談に行ったときには、北海道の函館近くにある銭函というところに就職がある程度内定しておったのでございますが、北海道は遠いからということで母親が反対したりしていたものですから、そういう思いもあって、老師に相談したら「高知に残れ」という話になりました。では、どこに就職したらいいかということになり、学校の先生か地方公務員をやったらよかろうということで、給料は少ないけれども、休みがちゃんと取れて気楽にやれる仕事じゃないかと考えたわけです。しかし、地方公務員も、最近はそういうことではございませんので、誤解のないように言っておきますが、当時はそういうように考えたわけです。当時は、坐禅の先輩方に学校の先生が多うございまして、夏休みとか冬休み・春休みを利用して坐禅会をしておったわけです。だから、休みが取りやすいなあと考えたわけです。

しかし、農業学校の先生の採用などは、そうそう欠員がありません。それで第2希望の地方公務員ということになったわけです。坐禅した

いがために、休みの取りやすい仕事を選んだという何とも不埒な考えでありました。

### 3 林業について

不埒な動機で仕事に就いたわけではございますが、入ってみますとこれがなかなか面白い仕事だと感じました。約35年近くの小役人生活をしているわけですが、約半分が出先で、半分が本庁という生活でございました。「林業」というマイナーな仕事のことを、ここに来られている方はあまりご存じないと思いますので、高知県の林業の概況を大体説明します。これは、あくまで私見であるという点をお含みおきいただき、聞いていただきたいと思います。

ちょうど県庁に入ったころ、昭和48年の第一次オイルショックの時期でございまして、それでちょうど高度経済成長の終焉のころでございました。昭和50年に林業普及員になりまして、山の中に駐在しましたが、当時まだ広葉樹を伐って杉・檜を植えるという拡大造林ということが盛んに行われた時期でございまして、ほぼ毎日のように山の現場に行って、木を植えたことの確認とその面積の測量をするというふうなことを繰り返しておりました。当時は雑木山を買いまして、そして、杉・檜を植えて、それをまた転売して儲けるというブローカーみたいな人もいっぱいおられました。

今振り返ってみますと、まだまだ山に若い方もおりましたし、活力もあつたなぁと思います。かつて駐在した村に行ってみますと、ここ10年ぐらいの構造改革や何やらで誠にさびれております。おるのは「老人と猪と猿だけ」であります。5月になって、たまたま鯉のぼりが見えたりすると、何となく嬉しくなります。この先、この村は一体どうなるんだろうという気持ちになります。

また、かつてデカップリングということが言われたことがありました。これはヨーロッパの考え方でありまして、ヨーロッパでは国境付

近の条件不利地域に生活する人に、国境を守るという意味からもそこに住んでいる人たちに所得保障をしておるそうです。そういうふうなデカップリングが山村地域には必要じゃないかという議論がかなりあったわけです。今や山村社会は、そこに人が住んでいる自体に国土を守るという公益性があるという考え方も必要ではないかと最近特に思います。

それから林業の施業について簡単に一通り説明しておきます。まず、杉、檜を1ヘクタール当たり大体3,000本ぐらい植えます。約30センチぐらいの苗を植えますから、雑草が生えると雑草に覆われて成長しませんので、その雑草を刈り払います。これは夏場にやりますから、かなりきつい仕事で、これを下刈りと言います。これを約7年ぐらい連続してやります。植えてから15年ぐらいしますと、植えた木同士が混み合ってきますから、抜き伐りして本数を調整します。大根の抜き菜みたいなものですが、これを「間伐」と言います。その間伐を10年に1回ぐらい約3～4回繰り返します。そして植えてから50年～60年、長いところで80年ぐらいして1ヘクタール当たり大体700本～1,000本ぐらいにする、3,000本植えたのを、その3分の1以下に間伐して減らしていく。それから、木を全て伐ります。これを「主伐」と言います。そして、また植えるという循環をしているわけです。ただ、京都の北山の磨き丸太とか、奈良吉野の長伐期の施業など、特殊な施業もありますけれども、それ以外は大体似たような施業をやっているわけです。

元に戻りまして、高知県の県土面積は71万ヘクタール、林野面積は約60万、つまり71万のうち60万ヘクタールです。そのうち国有林面積が約13万ヘクタール、それ以外の民有林面積が約47万ヘクタールありまして、その民有林のうち30万ヘクタールに杉・檜を植えましょうと、それも昭和53年の「全国植樹祭」までに達成しましょうというのが、私が就職したときの県の大目標であったわけで、それはほぼ達成され

ました。

目を木材の方に転じますと、昭和60年の9月に「プラザ合意」がありました。これは皆さん有名ですからご存じだと思います。そこから林業界はおかしくなりました。その当時1ドル240円だったのが120円に（数年の間に）上がったわけです。円が上がる最中に、あるチップ業者に聞いたんですが、「一体幾らぐらいまでなら、あなた方は太刀打ちできますか」と言うたら「180円」というお答がございました。しかし、現実には円はどんどんどんどん上がり、一時は80円代になったことがあります。しかし、その後120円代ぐらいに落ち着いてきました。円が2倍の力をつけるということは、2倍のコストの削減なり2倍の生産性を上げなければ、昔と同じようにやっていけないということでございますが、林業の生産現場で短期間に2倍の生産性を上げるということは全く不可能なことであります。それで国産材というのは急速に国際競争力をなくしていきました。

世の中は、バブル景気（バブル崩壊というのは、大体昭和天皇の崩御とともにバブルが崩壊しているわけですが）でどんどん株価も上がり、地価も上がった、そういう時代に林業関係者はかなり厳しい思いをし、努力をしておったわけです。またその円高と平行して、主にアメリカからの圧力を受けまして、一連の市場開放を進めてきたわけです。そして、外材製材品の日本市場アクセスが大幅に改善されました。その結果、従来は丸太段階で国産材と競争しておったものが、製材品で競争する。それから住宅部材段階での競争というふうに競争の中身が移行して現在に至っているということでございます。

現在では地球温暖化に対する、いわゆるCO<sub>2</sub>の削減対策という観点から、また林業が見直されてきております。

林業の話ばかりしておりますと、何の講演会かさっぱり分らなくなりますので、この辺でやめます。ただ、今、振り返りますと、林業という業なりわいが、全体としてずっと縮小してきた三十数年であった。その

中に身を置いた三十数年間であったなぁという感慨があります。

#### 4 仕事と禅について

それから禅が仕事に役立ったかということをよく聞かれますが、実際、ステージごとに役立ったと思います。担当というステージ、数人の部下を持つ班長というステージ、それから管理職というステージごとに、やっぱり坐禅しておってよかったなぁと思っているのが実感でございませう。

では、どういうふうに役立ったかと言いますと、我々はいつも「段取り・真剣・尻拭い」ということを入門したら先輩から聞いて、また、そう実行するように鍛えられてきておりました。ここ十数年前から研修に行きますと、「P・D・S」、Pというのは「プラン」、Dは「実行」、Sというのは「反省」です。また「P・D・C・A」と言って、Pというのは「プラン」です。Dというのは「実行」です。Cというのは「チェック」です。Aは「アクション」です。そういうようなことを言いまして、10年ぐらい前から我々の言うところの「段取り・真剣・尻拭い」のことを教えるようになりましたが、三十数年前は、あまりそういうことは言われませんでした。民間企業などではあったかもしれないけれども、地方公務員の職場では、そういうことはあまり言われませんでした。この「段取り・真剣・尻拭い」ということを聞いて、我々は育ったので、非常に役に立ちました。

「段取り・真剣・尻拭い」ということは、人間禅を創設されました立田英山という方、我々は「耕雲庵老大師」とお呼びしておりまして、本日の講演会ではそうお呼びしますけれども、その方の著<sup>あらかわ</sup>された『数息観のすすめ』の中に、

「段取り」とは、仕事の計画を立てること、「真剣」とは、心身をつくるめて、そのものになりきること、「尻拭い」とは、結末をつけ、善悪にかかわらず、責任を取ることを。



とおっしゃっておりますが、私なりに「段取り・真剣・尻拭い」が仕事に役に立ったことをお話いたします。

まず「段取り」については、どのステージでも大事なことでございます。特に班長のときには、細々と計画を立てます。それも3ヵ月単位で区切って、その進捗をチェックするようにいたしました。若い職員を見ておりますと、ある職員は残業もせずに期限内に仕事がスムーズに終わります。また、ある職員は残業して一生懸命仕事をしているけれども、期限内に仕事が終わらない。しかも客観的に見ると、能力にそれほど差がないと思われるにもかかわらず、そういうことがあります。その原因はやっぱり段取りにあるということに気が付きました。段取りがしっかりしてないということが分ります。段取りがしっかりできましたら、仕事の大体半分は終わったようなものだと思います。

次に「真剣」でございますが、これは仕事にのめり込むことだと思います。一口に「林業」と言いますが、その林業行政の中には幅があります。ごく大雑把に言いますと、普及員としての業務、治山ダムをつくったり、林道をつくったりという森林土木業務、木材関係の業務、それから林地開発、保安林とかいうものの許認可業務などがあります。そのような業務に異動によって替わっていくわけでありませけれども、人それぞれに、その仕事は「私には向いてない」と不満を言う職員がおります。そういう職員に限って、その仕事にのめり込んでいないというわけでありませ。どんな仕事でも、その仕事にのめり込んでおりましたら、必ずその仕事の中に楽しみが見い出せるはずなんです。

最後に「尻拭い」であります。これが一番難しい。地方公務員の職場でも、ここ2~3年ぐらい前から「目標設定制度」というのができまして、個人ごと、あるいは所属ごとに年間目標を立てまして、年度末にその出来具合を反省し、その次の年度に生かしていくという

ふうにしております。これもごく最近始まったばかりでありまして、うまく機能しているかどうかというところがあります。

昔は「行政の無<sup>びゅう</sup>謬性」、誤りのないということで、「行政の無謬性」ということがまことしやかに言われた時代がありました。また、そうでなくてはいけない、行政に誤りがあってはいけないと思いますけれども、特に上級官庁ほど、そういう傾向が強いので、そして過ちを認めようとしなから、どうしてもこの尻拭いができない。尻拭いというのは責任をとることでありまして、すなわち反省から始まりますけれども、その反省会をする中で、我々の周りには、すぐ相手の非難と考える人が多いようです。尻拭いしているのに、非難されたという受け取り方をする人が多いようでございます。

仕事を進める上で、何も悪いことをしよう、失敗することをしようとする人は、誰もおりません。人のためによいことをしよう、ぜひこれは成功させようとして努力するのであります。ですが、結果として失敗することがあるんです。その失敗の反省をしませんと、また同じ失敗を繰り返します。失敗を繰り返さないことが大事でありまして、行政では得てして、この反省・尻拭いが徹底していないくらいがあると思います。

次に、管理職のステージで役に立ったことは「正しく・楽しく・仲良く」ということであります。

耕雲庵老大師は『合掌の精神』の中で、

「正しく」とは、真理に合掌することである。真理を徹見し把握し、かつその通りに実行する。この把握と実行とを合わせて真理に合掌するという。「楽しく」とは、自己に合掌することである。自己の仏性に合掌することである。自己が随所に主人公となって日々是好日の楽しい日送りをすることである。「仲良く」とは、お互いに合掌することである。自他不二の精神に徹することをお互いに合掌すると言う。皆<sup>ことごと</sup>悉くが一仏性のあらわれであるから、

元来が自他不二であり、一切が自己の面である。これを仏教では、相即相入と言い、お互いに合掌するという。

とおっしゃっております。

その奥深いところは、肚に納めておいて、ここでは私の職場でこれをどう取り扱ったかということについてお話しいたします。まず「正しく」でありますけれども、我々は地方公務員職場でありますから、これをコンプライアンスと置き換えています。法令遵守よりも、もっと幅を広げて「社会規範の遵守」というようにとらえております。「正しく」がしっかりできませんと、次の「楽しく」とか「仲良く」もないわけでありまして、今日では、民間会社でも、このコンプライアンスが守られませんか、倒産するという事例もあります。最近では特に「赤福」の問題とか、いろいろコンプライアンスの問題が新聞沙汰になっておりますが、我々の職場は、地方公務員の職場でありますから、なおさらコンプライアンスというのは大事にしていかなければいけないということでございます。

次に「楽しく」であります。仕事を嫌々ながらやっているのでは楽しくはありません。仕事を楽しくやるには、やっぱりその仕事にひたり込むことであります。そうしたら、仕事は必ず楽しいはず。ですから、仕事が楽しくなるまで、仕事にひたり込もうと言っています。

最後に「仲良く」であります。これが一番難しい。ここ10年ぐらい公務員バッシングが続きまして、現在も続いていると思っておりますけれども、公務員の悪口を言っておったら、選挙に通るものですから、我々の職場も人数が減らされまして、昔と比べて随分余裕のない職場になりました。そのせいかどうか分かりませんが、「心の風邪」と言われます「うつ病」にかかる人が以前よりも増えてきたなあというふうに感じます。我々の職場は、林業技術職員がほぼ全数を占めておりますので、同じ林業技術職員としてお互いに助け合っていこうじ

やないか、人の痛みの分る人間になろうじゃないかと言っております。言っているものではないないかもしれませんが、そういうふうにしております。

それからレジュメにあります『五戒』は、我々「人間禅」の修行者がいつも心掛けるようにしておるものであります。これと「正しく・楽しく・仲良く」との関係は、「正しく」は「嘘を ついては いけない」、「楽しく」は「怠けては いけない」・「やりっぱなしに しては いけない」、「仲良く」は「我儘しては いけない」・「ひとに迷惑をかけては いけない」になります。それは「五戒」を守った結果が「正しく・楽しく・仲良く」になり、また「正しく・楽しく・仲良く」の中身が「五戒」になるという関係であります。

年度当初に、職場の方針を皆さんに示すときに、ここ4～5年は、職場の運営は「正しく・楽しく・仲良く」で、仕事をするときは「段取り・真剣・尻拭い」で行こうやという話をしております。

(つづく)

(平成19年10月27日、第53回人間禅講演会より)

## 著者プロフィール



東 絶海（本名／彪）

昭和23年、鹿児島県生まれ。高知大学卒業。元高知県職員。昭和47年、人間禅大重月桂老師に入門。現在、人間禅師家。庵号／洪濤庵。